

日米の考え方・生活習慣の対比

1年1組

今、僕は日記記録を見直しながらさまざまなことを頭に思い浮かべている。日本にはない、アメリカ独特の文化、生活方法など自分にとってはおどろくことばかりだった。おどろいたことをテーマにとって少し話したいと思う。

まず最初に生活習慣ということで、学校生活について自分の意見を述べようと思う。日本とはまったくとは言わないがかなり制度も生徒の感じも違っていた。なんかうまく説明はできないが、受け止め方が違い最後まで理解できずにいたりしていた。こう感じたのははたして僕だけであろうか。でもきっと少なからず最初一週間くらいはあまりの違いにどんな人が行ってもとまどうと思う。その違いの1つは授業制度である。日本では実験や、選択教科以外は、先生の方が教室まで来てくれる。ところが、アメリカでは生徒自身がその授業ごとに、その授業の教室へ移動するのである。まず僕はこのことにおどろいた。あれは忘れもしない。初日の一時間目、日本語の授業の後、僕は自分のすわっている席に授業終了後もずっとすわっていた。するとホストブラザーが一言僕に言った。『Why are you sitting?』と僕のほほは瞬時に赤らめた。とそれとたん、まわりの生徒の『クスクスッ』って感じの笑い声が僕の耳に・・・ はじらいと同時に屈辱を味わってしまった。すこし関係ない話をしてしまった。つまりこれはテーマとはなれるようだが、日本人とアメリカ人、そのものの根本からの考え方の違いだと思う。解放的な性格からとも言えるべきか、それにしてもこの違いにはおどろかされてしまった。もう1つは今、述べたアメリカ人の性格とも関係するかもしれないが授業体制である。日本人が勤勉すぎるのかもしれないがあまりにも自由なので、これもおどろいてしまった。このことは深くっこみすぎるとちとヤバイような気がするので、とりあえず自由な授業体制ということだけ触れておくことにする。

第2におどろいたのが史料館などの大きさなどである。PORTLAND STATE UNIVERSITY という大学では子供から大人までスタッフの人の手助けで勉強できるし、その大学はすごくでかいし、あと図書館の規模の大きさも。図書館は、札幌にあるような図書館の2倍近く、もちろん本の数も2倍いやそれ以上ありました。しかもコンピューターを数台設置してあり、自分達でさがしている本を便利に探せるという札幌にはもちろんないものでした。さらに OREGON HISTORY CENTER らしき所へ行った時、ものすごく古くからある物が、たくさん展示してあったり、その建物そのものがすごく立体的にできてあった。立体的にでこぼこした造りなのかと思ったら、実は一つの平面の壁に絵が書いてあるのだった。とにかくおどろきの連続であった。全然説明になっていない気がするのとはずかしいが、でもこのおどろきと規模の大きさや寛大さはわかってもらえるだろう。

次に日米の人と人の考え方の対比へと移るが、ここはさっきまでのようにわけがわからないようなこととは違い根本的な考えをもった中身のある説明になっていくと思う。なぜならこれこそが僕自身アメリカで一番身近に、一番深く感じとれたものであり、またむずかしく理解しがたいものでもあったからだ。まずこれはほとんどの人が理解できると思うことなのだが、日本人とはまったくと言っていいほど考え方が逆に近いものがある、ということである。大人の方は日米どちらもどうかかわからないが、少なくとも僕の年齢に近い人たちいわゆる、TEENAGER に近い人たちとは、考え方が逆である。まあ人間結局はみな同じなのだからそんなこと決めつけるのは、そこからしておかしいと言われればそれまでだが、でもこの未熟な僕なりに受け取ってきた考え方としては、たとえば政治的なものに関して言えば、もちろん僕も含めてだが、今の日本人、特に若い人達は自分の国がどういう情勢にあるのか、何がどうなっているのかわからない人が多数をしめるだろう。テレビなどの街頭インタビューなどを見ていればわかるが今のアメリカの首相、まして日本の総理大臣さえもわからない人もいる。ここからして考え方が違うのだ。日本人は自分に関係のあるもの、特に興味をもっているものに対しての努力、欲求はすごいものがあるがそれ以外はさっぱ

りである。もっと言えば『今の政治なんか知らなくたって生きていける。自分たちがどうしなくても政治家達がきちんとやってくれるだろう。』という考えをもっている人がいるだろう。しかしむこうの人は自分の国が今どういう形になっているのかなど、非常にくわしい。これは興味があったり、もし興味がなくても自分の生活に必要なだろうと日本人は考えがちだと思う。しかしそれはまちがいだと思う。僕にもそこがまだ理解がむずかしいがなんとなくわかるような気がするのだ。うまく言葉では言い表せないが、興味とか必要とかそんなくだらない2文字の言葉のためじゃなく本能的にというかなんというか、今の大人の人達が必要のために新聞の政治欄などを真剣に読んでいるのかもしれないが、でもその必要のためがいつのまにか習慣のようなものになってきている。これは政治のことについては不適當だが、他のものに関して似たものが僕達にもあると思う。だから僕もわかるような気がしたのだ。これは今は僕個人の考え方であり、自分一人しか考えないものではあるけれど、いずれ世界のみんなが、自分自身について、他の個人個人について、世界中の『人間』という1つの動物について見つめ直し深く反省し考え、それを改め直す時が来るような気がする。今、まだアメリカ、日本、南アフリカ共和国、その他の様々な世界中の地域で見た目による偏見で『こいつらとオレとは違う』という考え方が生まれている。全員とはいわないが少なくともこの考えが大多数の人の心の中に芽生えていることが確かだろう。このくだらない偏見が『人種差別』とか『優越感』みたいなものを生ませるのであろう。僕自身もこの偏見がないとは言わないが、自分の意志で極力少なくしているつもりだ。世界の各地で『差別』という問題が残っている。膚の色だとか、生活状態だとか貧しいからだとかで『優越』が生まれ、非難をあびている人々もたくさんいる。なぜだろうか。僕自身そういう、膚の色だとかこまかく、くだらないことつまり『外見』というやつは気にしていない。しかし心の中で『外見』とはまた違う『見かけ』というものが心の中にあると思う。自分と同じように『外見』に目もくれない人でも、その『見かけ』という魔物に惑わされているから『差別』なんて問題が起こるのだと思う。またこの文を書く最初のとおりにはならず話が違う方へ行ってしまったが、なぜ、このようなことに自分がこだわるのかということ、自分がアメリカに行ってこのようなことを目にしてきたからです。そして僕のホームステイした家も黒人の家でした。その子が僕にこう言っていました。『差別は絶対にしてはいけないことだ。差別というのは、膚の色だとかくだらないことで始まってしまう。差別というのは何も生まれない。ただ生まれるとすれば悲しみ。差別を受けた人達だけの心の中に刻み込まれる悲しみという絶対にあってはいけないものだ。』と。僕は改めてこの問題を考えさせられました。さらに『人は、僕が膚の色とかが違うので変な目で見ると奴ばっかりだ。本当の味方になってくれる奴なんてほんのごく少数だけだ。』と。この人達を支えるのはそのごく少数の人達とその人達の家族だけでしかありません。しかもこの子は母親を亡くし、育て親である祖母一人しか味方がいません。だからこの子のわがままっぽい性格もうなずけました。感情が激しいのです。特に悲しみに対して。愛が、愛情が、人の支えがほしいのです、きっと。だからこそ僕は一人でも多くの人に、そのことをわかってもらい、一人でも多くの人々の愛情が全てのひとにとどき、互いが信じ合い、認め合い、見つめ合って生きていく。そんな世界にしてほしいのです。世界に目を向け、本当の意味での『豊かな平和』を作っていくよう努力すべきだと思います。人の心に『悲しみ』の3文字を刻むことは許されないことなのです。この僕の文章を読んで、分かりにくい文章の中身ではありますが、一人でも多くの人にこの『悲しみ』の現状をわかってほしいと思います。僕はアメリカに行き『差別』というアメリカ人の考え方におつかった時、今までの考えが変わりました。心の中に住みついた『見かけ』という悪魔は消えるかどうかわからないが、少なくとも『外見』で判断すること、その考えだけは消そう。そう思いました。人は互いの『中身』で本音と本音をぶつけ合い、わかりあって行くものだというのを。人生たいして生きていないのに生意気なことを書いたような気がします。がしかし、これが当たっているとまでは言わないにしろ、間違ってることはないと思います。この文章すべてが、僕自身アメリカという国を心で感じとってきたすべてなのです。